

ていたときにバスを知りました。それまで、内科しか知らなかった私は、外科の流れを覚えるのに苦労していましたし、スタッフごとに「言うことが違う」「患者への対応や指導も統一されていない」ことに困惑していました。



船田千秋 看護師

その頃は、医療のガイドラインや標準、マニュアルという概念の浸透はまだまだでしたが、インフォームド・コンセントを充実させるためには何をすべきか、施設が試行錯誤を始めたころでした。当時の病棟棟長が「船田、バス勉強してみない？」と誘ってくれたのが幸いでした。何かで心の穴を埋めなかった私は、必死で勉強しました。バスにするためには看護以外のいろいろを知らなければなりません。外来受診から入院、確定診断・治療決定、手術、手術後、退院への援助、退院後、等々…。バスを作ることが、外科を勉強する効果的な自己学習となりました。そして、最初の乳がんバスが出来上がった頃には、外科看護師として、Drといっぱしの会話ができるようになっていました(と、自分では思っている)。この状況に自分でも驚きましたが、バスが出来上がったら、ちゃんとバスを使ってほしい、作ったバスを評価したい、患者の反応を感じたい、他のバスも作ってみたい、施設内にバスを広めたい、と限りない欲望に押され現在に至っています。

今、私は看護部の中間管理職ですが、診療情報管理士の資格を取ったことで医療情報管理・医療連携を業務とし、臨床からは離れています。現在の私は、全がん協加盟施設、地域がん診療拠点病院としての、特に院内がん登録の拡充・整備、がんの情報発信・情報提供を主業務としています。一見、バスとは何の関係もないような業務ですが、進化を続けている現在のバスは、大変利用価値の高いものであると考えています。

がんに対する根治的な手術バスが適応された患者は、ほとんどが「初発がん」であると考えられますので、がん登録が必要な患者を見つけ出すのに大変有効です。また、バス自身にDPCコード、ICDコード、Kコードを振っておけば、バスの管理も利用も合理化されてくると思います。

また、医療チームをどこまで発展させるか、何を目的とするか、何をアウトカムとするか、等々。バスというツールを使って『情報と目標を共有すること』は院内外にとどまらず有効です。今は、がん専門病院としての連携室業務

拡充を目指し、まず、バスを足がかりに地域の調剤薬局との連携を図っていかうと考えています。バスの概念は全国共通ですので、施設間や医療者間での相互理解さえできれば、活用の可能性は広がると考えています。

あの時、バスにかかわろうとしなかったら。今の私の看護師人生はもっと違ったものになっていたんだろうと考えることもあります。きっと、「日本人の死生観とがん医療について」な～んて、論じていたかもしれません。

バスを一生懸命やっている、時々“変な看護師”“看護師のくせに”という視線を感じることもありますが、日本全国に多くの大切な仲間もできたと、今がとっても楽しいので(つらいこともありますけど)『これが私の進む道!!』と、覚悟も新たに突き進んでいこうと思っています。

ですから、皆様、ご迷惑でしようが、ご指導よろしくお願いたします(次のエッセイは、このリレーエッセイに載せる写真を撮ってくださった前橋赤十字病院の副院長、池谷先生にお願いします)。

### 活動報告

2005年	
9月2日・3日	第4回前橋赤十字病院バス大会見学会(群馬)
9月3日	薬剤師のためのクリニカルパスセミナー(宮城)
9月15日	第21回編集委員会
9月22日	薬剤師のためのクリニカルパスセミナー(新潟)
10月8日	薬剤師のためのクリニカルパスセミナー(愛媛)
10月21・22日	第4回東北厚生年金病院バス大会見学会(宮城)
10月29日	薬剤師のためのクリニカルパスセミナー(福岡)
11月11日	第1回佐々総合病院バス大会見学会(東京)
12月2日・3日	第6回日本クリニカルパス学会学術集会(新潟)
12月15日	第22回編集委員会
2006年	
1月15日	第23回編集委員会
2月8日	第14回済生会熊本病院バス大会見学会

### 今後の活動予定

3月10日(金)	第24回編集委員会
5月27日(土)	薬剤師のためのクリニカルパスセミナー(大阪)
6月3日(土)	論文の書き方セミナー 「学会発表から投稿論文へのステップアップ」
7月8日(土)	2006年度クリニカルパス教育セミナー(東京)
7月22日(土)	2006年度クリニカルパス教育セミナー(大阪) 「現場で活かせるクリニカルパス ～チームで取り組む患者中心の医療」
11月17日(金)	第7回日本クリニカルパス学会学術集会
18日(土)	「クリニカルパスのさらなる進化を目指して」 (熊本県立劇場・熊本学園大学)

## 第7回 日本クリニカルパス学会学術集会

会 期：平成18年11月17日(金)・18日(土)

会 場：メイン会場 熊本県立劇場  
熊本市大江2丁目7-1 TEL：096-363-2233

サブ会場 熊本学園大学  
熊本市大江2丁目5-1 TEL：096-364-5161

会 長：副島 秀久(済生会熊本病院 副院長)

テーマ：クリニカルパスのさらなる進化を目指して

プログラム：特別講演、招待講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、一般演題発表(口演、ポスター)、バス展示他

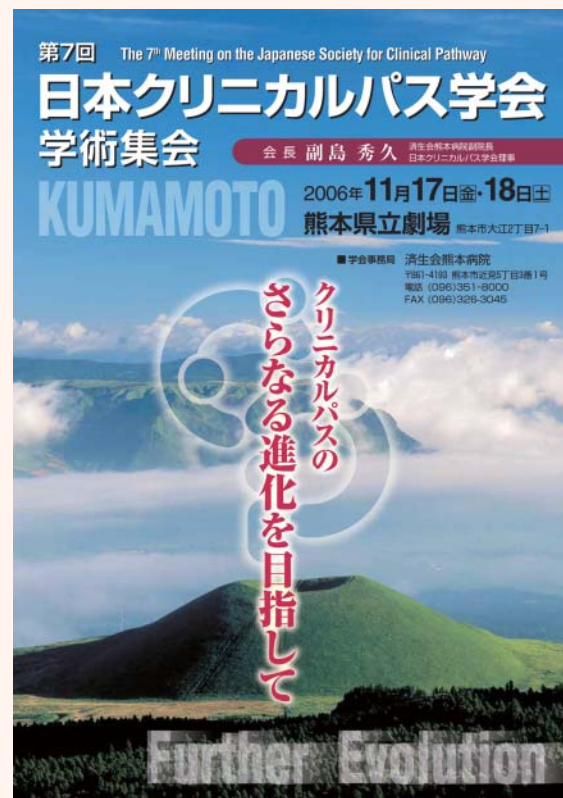
学会参加事前申込：平成18年5月頃からの開始を予定しております。

演 題 申 込：平成18年7月頃からの開始を予定しております。

詳細は学会ホームページ、学会誌、ポスター等でご案内します。

### お問い合わせ

第7回日本クリニカルパス学会学術集会  
事務局：済生会熊本病院  
〒861-4193 熊本県熊本市近見5-3-1  
TEL：096-351-8000  
FAX：096-351-8478  
E-mail：  
cp7kumamoto@skh.saiseikai.or.jp



Japanese Society for Clinical Pathway  
日本クリニカルパス学会

No. 15

発行日  
2006年2月15日

### in 群馬

## 第4回前橋赤十字病院バス大会見学会に参加して

東京都済生会中央病院 看護教育部長 古瀬敬子  
2005.9.2～3

日本クリニカルパス学会設立から8年。クリニカルパスは発展期にあるといわれ、今後、一般病院におけるDPC導入等の状況を考えますと、医療政策面からもバス導入は不可欠となっています。バス学会によるバス大会見学の企画は、良質の医療サービス提供をめざしたバスの普及、教育活動として、日本の医療の質向上に大いに貢献していると思います。

当院も、昨年、遅まきながらバス推進委員会が設置され、病院として組織的に取り組むこととなりました。今回、第1回バス大会開催を控えていた時期に運良く第4回前橋赤十字病院バス大会へ大勢で参加させていただき大変ありがとうございました。

バス大会の感想を申しますと、諸先生方のお話にあまり通り「バスは進化し続けている」の一言に尽きます。現在は施設内医療におけるバスの実践を主力としていますが、今後は地域医療との連携バスの開発など、実践領域の拡大、活用方法の工夫が求められていることがよくわかりました。第一日目のプログラムでは、バスを医療チーム共有の道具として組織的に活用し、バス本来の目的である医療の質保証、チーム医療の推進、医療効率などの機能向上がどのようになされているか、現況を伺いました。バス大会のメインテーマ「地域連携医療とバスの活用」に



おいては、地域の開業医とクリニカルパスの疾患別ネットワークの充実をめざして自己完結型から地域完結型バスへ移行されているという、バス連携活用の実際を見聞しました。地域連携バス実践には、バス開発、医療連携、TQMシステム整備および医療の質管理課(前橋赤十字病院で新設された課)や連携センターの位置づけと役割が重要であり、医療チームによるバス推進の「鍵」であると思いました。

そして具体的な活動例「気管支喘息発作における医療連携」による医師、看護師、薬剤師それぞれ専門的立場からの取り組みは、外来と病棟の連携における今後のバス開発とバス活用のモデルとなるような発表でした。「皆様の取り組みをお手本とすれば、当院も先へ進めそうかな」と内心励まされたことは事実です。

第2日目のプログラム、岡田晋吾先生のご講演「バスの発展と地域連携」は、G病院でバスが普及した理由、ご苦労を希望へと転換されたプロセス（裏の秘密）を楽しく聞かせていただきました。開業医の立場から地域医療におけるネットワーク、連携バス活用の重要性について「入院期間が短縮されると退院後にバリエーションが出る」と語られたことは、今後の大きな課題かと思えます。バスの方向性を先取りした連携バス実践方法を知ると同時に、先生ご自身の医療者としての哲学を感じ取ることができ、実の詰まった有意義なお話を聴く機会に恵まれ幸せな気分でした。「目標は一つ、すべては患者のために」先生のモットーにあやかり、バス推進役を努めてゆきたいと思えます。

そして何よりバス大会に受け入れてくださいました前橋赤十字病院の皆様方の参加者に対するご配慮とお心遣いには感謝申し上げます。プログラムに沿って私たちをエスコートし、痒いところに手が届くようなおもてなしをいただき、これこそバスの成果（チームの姿）ではないかと...感激でした。クリニカルバスは患者アウトカムの達成のみならず、真に職員のコミュニケーション、チームワークのツールであると確信した2日間でした。



in 宮城

## 第4回東北厚生年金病院バス大会見学会に参加して

2005.10.21~22

仙台オープン病院 看護師 佐藤早苗

秋も深まった2005年10月21・22日、東北厚生年金病院の4回目のバス大会見学会が開催されました。実は、2001年11月、公開前の院内クリニカルバス発表会の見学にお邪魔したことがありました。当時、当院でも看護師主体で作られた数個のバスが全く別々に動いている状態で、その必要性が病院内に浸透してない時期でした。バス作りを始めて1年足らず、全職員参加の院内バス発表会を開くということで、興味しんしんで会場の隅っこにおりました。多数の職

員の方が参加し、発表の中には、できたて使い始めたばかりのバスもあり、意見や質問が活発に飛び交い、病院としての積極的な姿勢・パワーを感じさせる、熱気溢れる会だったように記憶しています。今回やっと、当院でも院内バス大会開催の話が持ち上がり、先を行く東北厚生年金病院は、その後、どのように発展させたのか、参考にさせていただこうと参加しました。

まず、クリニカルバス実行委員会委員長である菅原重生先生より、「東北厚生年金病院におけるクリニカルバスへの取り組み」と題して導入後の経過・成果についてお話があり、次いで、佐藤美幸さんより「バスマネージャーの活動状況の報告」、医事課の小林さんから「DPC実績データABC分析とベンチマークの試行について」と続きました。医療の質の向上、患者満足度の向上を図るには、バスは欠かせないものですが、それを定着させ、発展させていくためには、トップの姿勢もさることながら、スタッフのモチベーションを維持していくための組織作りと運営が大事だと思います。発表では、その組織作りをどのように進めてきたのか具体的な活動状況・成果などが盛り込まれ、バス実行委員会の活動が全職員に浸透し、それぞれの持ち場で互いを支えあう努力をしていることが伺われました。

「THA（人工股関節置換術）バスの改訂と評価」の発表では、医師・看護師（外来・病棟）・薬剤師・PT・OT・栄養士がそれぞれ主体的に連携して関わっているシステムが紹介され、このバスの分析、評価は理学療法部門が行うという、まさしくこれぞチーム医療というものを感じさせられました。

翌日は、東京女子医大の下村先生の「バスが繋げる地域医療」と題して講演があり、以前、前橋赤十字病院のバス大会に参加した医師から、バスを、退院後のフォロー先の医師に連携するシステムにしていることを聞いていたので、興味を持って聞きました。患者は、地域社会に戻るのですから、バスを院内だけにとどめず、地域との連携も必



要であろうと考えます。連携室もバスに関わるすべがあると気づかされました。

又、勝尾先生の「徹底的標準化によるアウトカム設定とここまでやるかバリエーション分析」の講演は、楽しく聞き入ってしまいました。オールバリエーションにする根拠に納得し、帰院後の検討課題とし、アルゴリズムバスで整理をしなければと気づきながら手をつけないでいる現状を反省しました。

今回のバス大会では、病棟見学も楽しく、得るものが多々ありました。最後になりましたが、バス大会見学会を開催するにあたってご尽力いただいたバス委員はじめ関係者の方々、又、お忙しい中、病棟見学に付き合ってくださいました病棟師長さん、スタッフの皆さんありがとうございました。今回得た、バス委員活動のヒントを今後の当院の活動に生かしていきたいと思っています。



in 東京

## 第1回佐々総合病院バス大会見学会に参加して

2005.11.11

慈生会病院 看護科長 前泊まゆみ

11月11日、佐々総合病院のバス大会見学会に参加しました。当院（慈生会）からも近く、同じ規模の病院がどのような取り組みをしているのかという興味もあり、とても楽しみにしていました。病院は駅から近いため、患者は通院するのに便利だと感じました。病院に着いたときから、お客様扱いをしていただき恥ずかしい反面、うれしかったりして...。そんな中で、私を感じたことを述べさせていただきますと思います。

席に着いたときには、すでに藤間先生が「佐々総合病院のバス活動の変遷について」の話をされていました。本当にびっくりしました。なぜ医師がこれほど一生懸命にバスに取り組んでいるんだろう?どうしてこれほど詳しく経過を把握されているのだろうか?現場で医師が関わることで、解決される問題が多いことから、医師が積極的にかかわっているので、解決もスムーズに行くのだろうと、羨ましく思いました。

「看護部におけるバス活動」報告の中では、岩田師長の苦労がよ~くわかりました。何度もうなずき、「そう、そう、そうなのよ!」と心の中で言っていました。



外来と手術室の「連携バス」は、日帰りの手術が増えている現状もあるので、件数が増えるといろんな評価ができ、もっと使いやすいバスになる気がしました。

院内の見学では、各病棟・外来で使用しているバスについて説明していただきました。

一つ一つ丁寧に説明していただいて...忙しい中、ありがとうございました。あとから聞いて驚いてしまったことがもう一つ、説明してくださったスタッフの方たちは、バス委員ではないということでした。職員一人一人が、バスについてこれだけ理解して十分な説明をしている...当院でのバス委員会の活動について、職員への教育のあり方を考えさせられました。今後の課題にしたいです。

「結腸バスについて」は、会場にいらした先生方からいろいろなおアドバイスがでていました。「当院では、このようにしていますがどうでしょうか」「こういう方法もありますよ」など聞いていて、否定的な意見や言い方をされていないことが印象的でした。

副島先生の講演は、楽しくて、解りやすいため本当に聞き入ってしまい、一時間があっという間でした。もう終わり?という感じでしたので、ぜひ機会がありましたら、また講演を聴きに行きたい...当院の職員にも聴かせてバスについて理解してもらいたい（医師の皆様には特に）と思っています。DPC対策としても、益々バスは重要になってくるため、今後もバスの見直しを行い、チームでたくさんのバスを作っていきたいと思えます。

最後に、副島先生、佐々総合病院の皆様、学会事務局の皆様、貴重な講演・発表をありがとうございました。当院でもバス大会を開催できるように頑張っていきたいと思っています。今後ともよろしくご指導をお願いします。

in 新潟

## 第6回日本クリニカルバス学会学術集會を終えて

2005.12.2~3

新潟大学医歯学総合病院 薬剤部長 佐藤 博

2005年12月2、3日、新潟市の朱鷺メッセで第6回日本クリニカルバス学会学術集會を開催致しました。全国より3000名を超える多くのご参加と538題の発表演題等を頂き、盛会裡に終えましたこと、この場を借りて改めて御礼申し上げます。大会終了後、2週間を経ずして大雪に見舞われ、上越新幹線も一昨年の新潟県中越大地震以来の運行停止を余儀なくされましたが、この災害続きの新潟にあって無事終了した学術集會を思い出す度に、己の幸運と背中合わせの厳しい現実には複雑な思いを抱くこの頃でもあります。

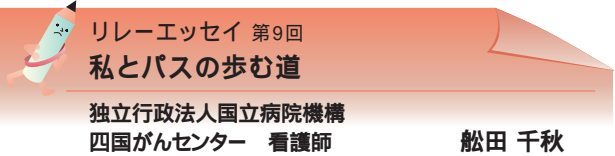
学術集會会長に初めての薬剤師、さらにバスでは後進の大学院による開催と、執行部としては恐らく大英断のもとに行われた学術集會ですが、その間、企画委員である阿部俊子先生が、突如「刺客?!」、さらに「小泉チルドレン（ご本人は小泉シスターズとのこと?!）」として衆議院議員へのご栄転というお目出度い出来事もありました。学術集會は、海外からの招待講演（2）を始め特別講演（3：経営管理・医療の質評価・医療訴訟）、教育講演（7：医療労働環境・記録・個人情報保護・DPC・コスト管理&院内物流・CPと薬剤師・災害時の組織作り）、シンポジウム（2：電子カルテ・医療用ソフト）、パネルディスカッション(大学病院とバス、ワークショップ（5：病診連携・人事考課・薬剤師の臨床アウトカム・ジェネリック医薬品・栄養関連分野）、CP作成実践セミナー、特別企画（患者状態適応型バス）および特別展示（新潟CP研究会）と盛り沢山の企画を頂きました。懇親会では、信濃川対岸の会場までウォーターシャトルを配備し、短時間でしたが会員の皆様に夜景と舟上り?をご堪能頂きました。会長招宴や懇親会では、新潟芸妓による演舞、新潟の樽酒による鏡割り、万代太鼓、新潟



アルビレックスチアリーダーズなど、新潟情緒の今昔をお楽しみ頂きました。市民公開講座では、小西先生と中井美穂さんにバスと医療を語って頂きましたが、県民のみならず多くの学会参加者で会場が満杯になったのは、やや驚きでした。市民お薬相談会と市民対象の栄養相談も併設致しました。当大学から副学長は会長招宴、病院長は懇親会に参加頂き、さらに病院の経営戦略課長を始め多くの医療スタッフも参加致しましたが、異口同音にバス学会のスタンスの広さと会員の熱気を賞賛致しておりました。この学術集會開催が、未だバス途上国である新潟に、新しい医療文化の芽生えとなれば幸いです。

最後に、今回の企画運営、講演、発表、座長等をお引き受け頂いた先生方、実行委員、学会事務局並びに運営担当のスタッフ、さらには製薬企業等のスポンサーの皆様にご場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

今回はバス発祥の地でもあります熊本ですが、「お酒」から「焼酎」へとさらに度数の上がった充実した学術集會の皆様とまたお会いできることを、今から楽しみにしております。



独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター、船田千秋です。

バス学会の皆様、今年もよろしくお願ひします。まず、恥ずかしながら自己紹介（時々ご質問をいただくので(笑)）をいたします。未年9月23日生まれ、O型、てんびん座、「犬占い」では「シベリアンハスキー」、「歴史占い」は「かぐや姫」です(年齢はご想像にお任せします)。東京都小平市で生まれ、3歳で両親の郷里岡山に戻り、看護学校卒業までを過ごしました。卒業後は都会での生活に慣れて?東京医科大学付属病院血液内科に就職、看護師人生を歩み始めました。が、見事、寿退職を果たした後愛媛に住むことになり、四国がんセンターに就職、現在に至っています。

私とバスとの馴れ初めですが、...。四国がんセンターでは、呼吸器・血液内科病棟でがん看護に目覚め、ターミナルケアを極めようと（勝手に!）考えていた平成10年、外科病棟への配置換えとなりました。ターミナルケアにとどっぷり浸かっていた私は、外科のアップテンポな看護、医療になかなか馴染めず、何か空虚さを感じ